
Fate/stay/night ~おかしな英霊~

がるまーちょふ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F a t e / s t a y / n i g h t 　　＼おかしな英霊＼

【Nコード】

N 5 0 7 6 Q

【作者名】

がるまーちよふ

【あらすじ】

聖杯戦争・・・・・・・・それは魔術師たちがたった一つの聖杯を巡って争う

儀式。そして第5次聖杯戦争の時、イレギュラーが突如として参戦する。

はたして彼は何をもたらすのか？

作者は初心者ですのでやさしくしてください！
あと、原作壊れますので無理な人は戻るを押してください。

朝ですよ（前書き）

初投稿です。

温かい目をお願いします。

朝ですよ

——ここ冬木市ではある儀式が行われる。

ある者は言う、これは神聖なるものだ。

ある者は言う、これは神秘に近づくためだと。

ある者は言う、これは……

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
未来の始まりだと。

ちゅんちゅん！

バサバサバサ！！

窓辺ですずめが鳴いている。

その音にうなされるように起きる少年。

「うう……朝か……」

茶髪のツンツン髪に身長は170後半といったところだ。

「しかし、久々に現界したなあ……………いつぶりだろ？」

そう言いながら今少年が勝手に居座っているビルの扉をあける。

目の前を車が行かい、人がどんどん歩いていく。

「少しもない間に進歩したんだなあ……………お兄さん悲しい……」

そんな事を言いながら外に出て、カッン！と地面を蹴る。すると……

ブワッ！！

突如として少年が地上50mまで飛び上がった。

しかし、不自然なところに周りの人間は誰ひとりとして彼に見向きもしない。

いや、誰一人として彼を認識していない。

それは彼が不思議な存在だから・・・・・・・・・・

「さて、例の戦争でも参加しにいきますか!!」

そのまま少年は空を蹴って行った。

向かう先は

冬木市・
・
・
・
・
・
・
・

朝ですよ（後書き）

短めです。

ぶっちゃけ原作壊れますのでその点注意してください

え、もう始まってるの！？（前書き）

はい作者のがるまーちよふです。

基本亀更新ですのでご了承ください。

え、もう始まつてるの!?

——さあ、集えよ7人のマスター!!

——そして戦え! 聖杯を掴むために!!

イレギュラーも参加するよ!

〈英霊SIDE〉

」
「こちら3点で合計780円になります!」

皆さんこんにちは、英霊です。

え?どのクラスの英霊かだつて?

それは・・・・・・・・・・・・・・・・な・い・しよ

まあとりあえず自己紹介で俺の名前は、
ミホウ アキラ
御宝 明と申します。

今回はイレギュラークラスの英霊やつてます。

いやあ、それにしてもこの冬木って所いいところですね
この和をモチーフにした佇まいの物件とか、あそこに見える洋館だ
とか

英霊の俺からしたら一度は欲しいマイホームですよ。

しかもあの洋館なんか霊地の集まるところらしく良い物件やー！

「さつてと、冷めないうちに肉まん食べちゃあー」

さっきコンビニで買った肉まんを冷めないうちに食べる。

それにしても、あの店員けっこうかわいかったなあ。

「アプローチかけとけばよかった……クソッ!」

そんな事をばやきつつ俺は肉まんを食べ終える。

一緒に買ったお茶を飲み一息ついた後、また歩みを進める。

「とりあえず出遅れたけど、戦争つてもう始まってんだよなあ」

そう、良い忘れていたが、聖杯戦争は既に始まっている。

参加者達からすると俺は大きく出遅れた存在だ。本来ならマスターから

お叱りを受けるべき立場であるが生憎俺にマスターはいない。

なぜなら、

「無理やり世界に頼み込んで現界したけど、もうちょい冬木よりに
召喚

してくれてもいいんじゃないか？世界さんよお……..
まあ生活費まで出してもらってる身だから何も文句は言えないけど
さ。」

故いに俺はイレギュラーなんだなあ
・
・
・
・
・
・

〈英霊SIDE OUT〉

く士郎SIDEく

まずいますいますいますい!!

にげる……、

逃げる逃げる逃げる逃げる逃げる逃げる!!

「はあはあ、っ、っはあ、なん、なんだあいつ!!」

今俺は逃げている。

何から逃げているかだって？俺にも分からない。

ただ、これだけは言える。

逃げないと、殺される。

そう、あれは放課後の事だった。

「放課後の学校にて」

「よし！これで掃除終わりだ！！」

俺は慎二に言われて弓道場の掃除をしていた。
終わるころには当たりの景色は既に黒一色だった。

「さて、家に帰ってご飯のしたくでも……」
「ガキン！キン！」
「なんだこの音？金属音か？」

不意に校庭の方から金属をぶつけたような音が聞こえてきた。

自分で言うのもなんだがこの時間に生徒が残っているのはおかしい
ので

様子を見に行った。

「弓兵如きが剣士のマネごとなど!！」

ギンギン!ガキン!

「その弓兵に手こずっているのは誰かね?」

シュンスパン!!!

遠目からでも分かるような深紅の槍を持った男がもう一人の男に向かって

槍の連撃を繰り返している。

対する赤いコートの様なものを着た男は両手に持った白と黒の中華
刀の
様なもので捌いている。

「（なんでこんな時間に、しかも学校でこんな事が起きてるんだ！？）」

思わず俺は声が出そうになったが、その場にいる一人の少女を見て固まる。

あの少女は確か……成績優秀で優雅な雰囲気を纏った学校の人気者

「（遠坂………凜！！どうして彼女がこんなところに！！）」

思わずフェンスをガシィ！と掴んで音を立ててしまう。
すると

さっきまで争っていた二人の男性が不意にこちらを凝視してきた。

まずい！！

俺は咄嗟に走り出す。

そして今に至ると言うわけだ。

「はあはあ、こんだけ、逃げれば、はあ、大丈夫だろ。」

後ろを見ながら学校の廊下を走る。

だが、

「ちょこまか逃げるんじゃないよ!」

正面にいきなりさっきの槍を持った男が立っていた。

「ッな!どうして!?!」

思わず腰を抜かして座り込んでします。

槍の男は俺の疑問に答えるでもなく、口を開く。

「一般人に見られるとは……………これも運命だ一瞬で逝かせてやる。あばよ」

男はそう告げるともっていた深紅の槍を構える。

「どづいづこ……………」

追求をしようとしたが、なぜか胸に変な感覚がある。

声がでない。

血が滲みでてくる。

何事かと胸を見ると血の色と変わらない槍が心臓めがけて刺さっていた。

場違いに思う事は先程の一撃は全く見えなかった。
それもなにも感じないほどに。

ただただ、まるで他人事のように自分の胸から血が流れるのを眺める。

そこで俺の意識は途絶えた……………

く士郎SIDE ENDく

「遅かったわね．．．．．」

）凜SIDE（

今私の目の前には一人の男が血だまりの中で倒れている。

学校でよく壊れた物を修理したり、弓道が得意とかで有名な衛宮くん。

そう彼が。

「リン、今さらだがもう遅いぞ?」

「ええそんなのは分かってるわよアーチャー……………」

私は自分の英霊にそう答える。

衛宮くんはランサーの攻撃で心臓を一突き……………」

これは、私の、せい……………よね。

たぶん、これは許されるような事ではない。
けれどもこうしなくちゃいけない気がした。

だから私は、父が何年もかけて魔力を貯めていた赤い宝石を懐から
取り出す。

「それは……！！リン、本当に良いのかね？」

「仕方が無いじゃない、私の責任だから……！！！」

手に持った宝石に自分の魔力を流していく。

ごめんなさい、衛宮くん。　こんな事しかできなくて。

そして私は作業を終えるとアーチャーと共にその場を後にした。

明
SIDE

凜
SIDE
END

「なるほどなるほどここがアインツベルン城かあゝゝゝ」

いやあゝそれにしても此処が噂のアインツベルンねえ

昔不正して俺みたいなイレギュラー出したって所でしょ？
なんか親近感わくなあゝゝゝゝゝ

と、俺がお城の周りでジロジロと見物しているとゝゝゝゝゝゝゝ

ザッザッ！！ ドシンドシン！！

「こんな夜遅くにお兄ちゃんどうしたの？」

いきなり俺の背後に、雪の様に白くそれでいてルビーのような瞳を
持った

少女がなんかゝゝゝゝゝゝゝゝゝついついおっさん連れて歩いてきた

「お、お嬢ちゃんこそこんな夜中にどうしたの？」

なんかおっさんさつきからずっと『フッー！フッー！』とか息があらいい
んですけど・・・・・・・・

「それはあ、お兄ちゃんが私の家をじろじろ見てるからだよ？」

微笑んで俺に答えてくれる女の子・・・・・・・・・・ちょっとドキッと来た。

「って事は・・・・・・・・・・此処お嬢ちゃんの家！？つかあ~~~~
~~~~  
VIPだねえ~~~~！！！！」

その年でこの家とはいやはや時代も進んだもの世のお・・・・・・・・

その点俺なんて………世界が支給してくれたアパートで  
寂しくコンビニ弁当だったのに。ちくしょう！！！！

「それよりお兄ちゃん………ただの人間じゃないよね？」

女の子が疑わしげな視線で俺を睨みつける。  
ドキョン！  
！！

おいおいおいおい、待ってくれ俺は年上の女性にしか興味が無いはずだろ！！？

どうした俺？！　なんで今胸が高鳴った？落ち着けえ！！！！

「おうおうおう！！確かに俺はただの人間じゃねえ！いや違うな、人間にしては  
もってはいけない物を持っている。さぁお嬢ちゃんそれはなんだと思う？」

いきなりの俺の質問返しに少し戸惑いながらも？マークを浮かべる女の子。

ふっふっふ、これが俺の人間が持つてはいけないものだ！！

「お嬢ちゃんよく見るがいい！！これが人間の男にしては立派すぎる……」

「……俺のマグナムだ！！！」

その瞬間俺は来ていたズボンを脱ぐために勢いよくベルトに手をかけるが……

「キヤ、きゃああああ／／／／／／／／ば、ばばバーサーカー！  
！あの人を止めて／／／」

それをする前に巨大なおっさんが俺に突進してくる。  
はは／／んさては、こいつ

「おっさん！あんた俺のマグナムに嫉妬してんのか！？そうなのか！？」

瞬間気のせいだと思いが一瞬バーサーカーと呼ばれたおっさんがキレたように見えたのは俺の気のせいだ。

まあ、なんとかおっさんの突進を受けずにジャンプして近くの電柱の上に

ストツ！つと着地する。

「ははっ！お嬢ちゃん次会うときは名前を覚えてくれ！！あと、俺のマグナム  
もしっかり見せてやるよ！！そして、おいおっさん！俺に嫉妬すんなよ！！」

俺はそれだけ言うとジャンプして屋根に飛び乗りその場から退く。

後ろで雄たけびと、少女の『変態！このばかあああ！！！』と言  
う悲鳴が  
聞こえた。

しかしあのおっさん、昔気まぐれで神話時代に行った時にあった  
ヘラクレスの旦那によく似てた気がしたなあ。

まあ世の中似た人物は3人いるって言うしマグレだろ！！！！

とりあえず帰って寝よーーっ

}  
明  
SIDE  
END  
}

え、もう始まってるの！？（後書き）

ちょっと原作崩れてきたかな？

なんか戦闘描写のアドバイスとかいただければ嬉しい限りです！！

もしも、バレンタインに聖杯戦争があったら・・・・・・・・（前書き）

今回はちようぶざけました。

もしも、バレンタインに聖杯戦争があったら・・・・・・・・

もしものお話〜

凜SIDE

「出でよ、天秤の守り手よ!!」

フアアアン!!

いる部屋が不気味な光に覆われていく。

私は聖杯戦争に参加する際に必要とされるサーヴァントを召喚している。

といってもさほど難しい事ではない。魔術師ならば大抵の人間は召

喚に

成功できる。まあ触媒があればの話だけれどね。

ちなみになぜか知らないけど、さっきから家のリビング辺りからず  
つと

『アーメン、アーメン』って不気味な呟きが聞こえてくるのは気の  
せい  
かしら？

私はすごく気になるその声の存在を追求するべくリビングに向かって。  
た。

「願わくば最強のサーヴァントである事を――！」

でも私は気付いていなかった。

私がこの時触媒にしていたのが、甘い、甘い……………  
・  
・

チョコレートだったとは……………

バレンタインだよ!! GIVE ME CHOCOLATE!!

リビングにて

「オウウー！！貴方が今回のマスターでスカ？」

私の目の前にいるこの牧師？は十字架を握り締めながら私を見ている。

ってか、完璧外人よね？

「と言う事は貴方が私のサーヴァントで良いわけね？」

すると外人の男性はうんうんと頷く。

「YES！私を引き当てるとは貴方もなかなか運がいいですね！！」

なんとも胡散臭い対応をするこの男。  
正直イラッと来る。

「まあそんな事より、貴方の真名とクラスを教えてくださいませんかしら？  
そうじゃないとこれからの作戦が立てられなくてね」

すると男は少し考えるそぶりを見ると、私の方を見て変な質問をしてきた。

「マスター、貴方は今恋をしていますか？」

ん？なに？

こいつなにが言いたいわけ？

「はあゝ・・・・・・・・あのね、私は貴方にク・ラ・スと真・名を聞いたの！！」

少し怒鳴りつけるようにしゃべる。  
しかし、向こうも真剣そのもので私を見返して、答える！！と言わんばかりの  
目力を向けてくる。

結局私が折れるのかなのかしら・・・・・・・・

「まあいいわ、答えて上げる。正直いうと私はまだ好意に値する人間が

というか、そんな人あった事ないわ。」

するとあからさまに【はああああ】とため息については私を見降ろして来る。

というか何気このサーヴァント私よりも身長が高いわね・・・・・・・・長身で、しかも若い。

色々分析しながら見てみると、男が話し出す。

「駄目駄目だねマスター。私は恋愛での悩みがあるから召喚されたと思っただのに・・・・・・・・・・はああ~~~~」。

また深いため息をつく。

いいかげんガントでもぶっ放そうかしら??

「あのお〜〜いいかげん私の質問に答えて下さる?????????  
」?

ちよ〜〜〜と鋭い視線を送ると、少しビクッ!〜としてきび  
きびと

答えだす。というか、最初から答えてよ!

「ま、まあ私の真名はウアレンティヌス、昔カトリック教会で仕事  
をしてただけど  
仕事中内緒で兵士を結婚させてしまったら、首になっちゃったんで  
ス・・・・・・  
あ、あとクラスはナイデ〜〜ス  
」

「・・・・・・」

「・・・・・・」

短い沈黙。後の

「はあああああああああああああああああああ！！  
！????？」

一息ついて～

「それで、あなたがクラス無しという事については分かったわ。  
でもまさか目の前にあのバレンタイン発祥の人物がいるとは・・・  
」

このウアレンティヌスがどうしてクラスが無いのかと言うと、  
生前魔術的活動もそして、武術などといった物を行った事が無いら  
しく、  
クラスが割り当てられていないのだとか。

しかも今回は私がチョコを触媒にしたせいでイレギュラー召喚。  
一応座からは聖杯戦争の知識は与えられているみたい。

「さっそくだけどウアレンティヌス作戦を………ってあれ  
!?」

何処行つたああああああ!!?」

少し目を離れたすきにあの馬鹿、家からでて行つたの!!

あいつ令呪の意味わかってんの?!

「まったく、面倒なサーヴァントを召喚したわ!!」

こうして私は馬鹿を追うために家から飛び出した。

「キシキシシ！・冬木の管理者・・・・・遠坂凛！！まってる、  
すぐに

殺してやる！！」

凛  
SIDE  
OUT

S  
I  
D  
E

「はあ、はあ、見つけたっ!!」

少し走った所にあつた公園に奴わいた。  
なぜか分からないけどゲートゴルフと一緒に  
おじいさんたちと  
楽しんでいる。

「お兄ちゃんおいしいね！！ちょっと力の入れすぎだよ〜」

「オウ、すいませんネ〜、でも楽しいです！！」

スタスタスタ

バゴォ！！

「OH！痛いでえ〜〜ス！！！！」

「あんたこんな所で何してんのよ！！秘匿って言葉知ってるでしょ？！」

頭を押さえながら涙目で凜をみるウアレンティヌス  
その様子は真剣そのもので、どれほどの威力だったかを物語っている。

「マスター、淑女がそんなだとこの先私心配です」

「ねえあなたもしかして自分が悪いって事自覚してないの……？」

絶対零度の視線を受けてもなお屁理屈を述べるウェアレンティヌスにいいかげん嫌気がさしたのか、もう構う様な事はしなくなった。

「それじゃおじいさんまた今度、一緒にやりましょう！」

そついつておじいさんにゴルフの道具を返すと、私のもとに素直に帰って来た。

その表情はひどくめんどうだ。といった顔であるのが気に食わないが。

「ふむふむ、大まかな内容は理解致しました。それよりもマスター、あなた

はストーカーされるといふ趣味があつたのですか？」

いきなりのウアレンティヌスの問いに？が浮かぶ。

だが一寸考えて理解した。自分が誰かほかの第三者に後をつけられている事に。

皮肉にもウアレンティヌスに教えてもらつたという事態になつたが。

「ウアレンティヌス、敵の数とか分かるかしら？」

「まあ、一人の単体ですね。ですが、なかなかの実力の持ち主の様で………」

この英霊がふざけもしないで相手の戦力を教えてくるとなると本物の様ね。

ちようどどうするかを話し合っていると、向こうからお出ましになつてくれた。

「ツクツクツク！君がこの冬木の管理者である遠坂 凜で間違い無いか？」

真っ黒なコートに身を包み、その上からでも分かるような巨大な肉体。

見ただけで分かる絶対強者。

その深紅の瞳が凜をとらえたまま逃さない。

「ええそうよ。そういう貴方は……誰かしらっ！！！」

言わずが早く指先からガントを放つ。幸い今いる場所が人里離れただけあって  
秘匿にはもってこいのところだ。

「おいおい、いきなりの攻撃とはつれないね」

ガントを喰らっても平然を立っている男。  
傷らしい傷は見当たらない。

「マスター、奴はどうやら人間ではない見たいです」

男はこちらに歩いてきながら嬉しそうな顔をして近づいてくる。

「へえ、その牧師みてえな奴は気付いたみたいだが、そうだ。俺様は今でこそまだ名前が知られていないが、近い将来死徒27祖の一位に君臨するバルザ・ゲース様だ!!」

バルザは自信の爪を刃物の如くのばすと同時に脚力に力を加えて一心不乱に突っ込んでくる。

凜は見極めて回避をするが、それを魚雷の如くしつこくバルザも追う。

「逃げてても無駄だぜ！人間であるお前と死徒である俺。勝負は目に見えてるだろう？さあとつと血を寄こせえ！！！！」

此処に来てさらにスピードが上昇するバルザに、先程からの疲労がたまった

凜には避ける事が出来なかった。

「（つく、悔しいな．．．．．結局遠坂の悲願は達成できないのかなあ．．．．．）」

最後の力を振り絞って放った攻撃も奴は見向きもせずにかわし、尚  
くらいついて来る。

ここで終わる事だろうと目をつむる。だが．．．．．

ヒュッ！！ドガァ！！

「Oh！ごめんなさーイ！加減を間違えました！」

いつの間にかメリケンサックを両手に付けてバルザの顔面を殴り飛ばす

ウアレんティヌスの姿が目の前にあった。

「それで間違えました。今のは殺すつもりで殴ったんですが．．．

・・・

まだ大丈夫みたいです・・・ネ!!!」

言うが早い。さすがに英霊ということか。死徒顔負けの身体能力で敵の

顔面を1秒間に5回は殴っている。

時には蹴りを放ちながら。

「ちょっとウアレンティヌス！あんた生前武術やってなかったんじゃないの?!」

そう、あいつは確かに私に向かって生前武術的活動もしてなかったと言いきった。

しかし今のあいつは完璧なる武の体現者。おいそれとマネをできる存在ではない。

「まあ確かに人間相手に武術的活動はした事はありません。ですが、このような吸血鬼相手の時はやってましたヨ?」

しゃべりながらも器用にバルザの腹を殴り、顔を殴る。

対するバルザが反撃をなぜしないのかと言うと、実はしていてもすべて

はじき返されるので攻撃が通じないのだ。

「はあ、はあ、テメエ……何者だ！！並大抵の英霊ごときに俺様が

此処までされるわけがねえ！！」

「………っふ、何簡単なことだ。私の力は愛の力だ！！」

バツゴオオオン！！！！

拳を握りしめウアレんティヌスは渾身の力でバルザをたたきのめす。

「ああああああ！！！！悪かった！この通りだ！もうむやみやたらに攻撃は

しねえよ！！だから、な？勘弁してくれ！！」

バルザは降参と言わんばかりにその場に座った。  
ウアレんティヌスも攻撃の手を緩める。

「本当にもうしないんだナ？」

「ああ、神に誓ったっていい!!」

その言葉を聞くとウアレンティヌスはそのまま背を向け凜のところまで歩いて行く。

「（はは、馬鹿が!!死徒の俺様がそう簡単に人間を襲うのをやめる訳がねえ

だろ!!）馬鹿め、死ねやああああああ!!」

奴の行動にいち早く気付いた凜がウアレンティヌスに叫ぶ。

「ウアレンティヌス、後ろ!!」

だが、そんな凜の心配も杞憂に終わった。  
なぜなら、

ガシッ!

「なっ！あのタイミングで俺の拳を掴むだと？！」

後ろを向いたままバルザの右ストレートを左手で受け止めていた。

「やはり吸血鬼はうそつきだな。もういい。今からお前を”殺す”」

それは仮にも聖職者が口にして良いという言葉ではなかった。  
けれども彼は敢えてこの道を選んだのだろう。

「そう言えばお前は言ったな。なぜ私がこんなに強いのか？つて。」

不意に語られる彼の強さについてバルザは愚か凜ですら黙った。

「教えてあげますヨ。英霊という存在は信仰があればある程強大な力を

手に入れられる、考えてみなさい。特にマスター、私は今この時期に召喚

されたサーヴァント。世界中の皆が思い人にチョコを渡すこの日。  
仮にも私の名前を原型にしているのだから、自然と私も信仰の対象

になる。

いわば私は全世界の人間に信仰されている英霊なのです。

さあ謎は解けましたかナ？」

「は、はははは……ははは、私ってなんて英霊を呼び出したんだろ。」

凜は心底驚いていた。

そこらへんの英霊でも全世界の大人から子供まで知っているとまで行かないが、

彼、ウアレന്ティヌスに限っては子供から大人、さらにはおじいさんまで

知っているのだ。

だからこそこの強さなのか。っと凜は再度確認した。

「さて終わりの時間です。せめて安らかに来世を望みなさい……  
……

私が殺す。私が生かす。私が傷つけ私が癒す。

我が手を逃れうる者は一人もいない。我が目の届かぬ者は一人もいない」

「てめえそれは埋葬機関の！？なぜお前が！！」

バルザがとめに向かうが尚もウアレンティヌスは詠唱をとめない。

「打ち碎かれよ。」

敗れた者、老いた者を私が招く。私に委ね、私に学び、私に従え。  
休息を。唄を忘れず、祈りを忘れず、私を忘れず、私は軽く、あらゆる重みを忘れさせる」

「やめろやめろやめろおおおおおおおおおおお！！」

まるで小さい子供のように暴れ周り、叫ぶ。

「装うなかれ。」

許しには報復を、信頼には裏切りを、希望には絶望を、光あるものには闇を、生あるものには暗い死を」

今まで目をつぶり詠唱していたウアレンティヌスが瞳を開きバルザを

見据えて構えを取る。

「休息は私の手に。貴方の罪に油を注ぎ印を記そう。

永遠の命は、死の中でこそ与えられる。

——許しはここに。受肉した私が誓う。

——”この魂に憐れみを《キリエ・エレイソン  
《——！！”」

突き出された一撃はバルザに逃げることを許さずに、見事命中する。  
最初は浅い一撃だと思われたその技だが、だんだんと奥深くにまで  
入りこみ  
ついにはバルザを貫く。

「ぐうつばあはああああ嗚呼あああ！！」

しかし、ウァレンティヌスの思惑は外れて、案の定バルザは生きて  
いた。

瞳をさらに真つ赤に染め上げ一直線にウァレンティヌスを見つめる。

「コロスコロスコロスコロスコロスコロス！！！！！！てめえは俺がコロス！！！」

もう人の形をとどめずにまるで獣のような姿でウアレンティヌスに突っ込む。

「はあしつこいですねえ、仕方ないです。ヨイショ！！！」

ウアレンティヌスは冷静に対処に移る。  
どこから取り出したのかわからない巨大な機関銃？のような先端に杭がついたものを構える。

「コロスコロスコロスコロスコロスコロスコロス、うるさいです」  
コロ・・・・？」

すると突如バルザの動きが止まる。  
別に腕を攻撃されたわけでもない。

かといって足を攻撃されたわけでもない。

ならどこだ？

「あなたの胸を刺しました」

そういうことか。

なぜかバルザはもう自分は絶対に助からないとわかってしまう。  
本当にどうしてかわからないがそう思う。

「今度こそ本当にさよならです」 第七<sup>セブン</sup>聖典！！」

キュシュユウウン！！！！！！

まばゆい光がバルザに降り注ぐ。

まるで天からの恵のような美しく尚且つ神々しい光により今度こそ  
バルザは存在そのものを消滅させた。

「……………ウアレンティヌス？気のせいじゃなければ貴方

がいま  
もっているその武器と、さっきの技。あれは埋葬機関のものじゃないかしら？」

「そうでしたっけ？まあ結果倒せたんだから過程は気にしなくても  
No problem!!」

「あんた英語の使い方間違ってるわよ……」

他愛のない話を交わす。

ウアレんティヌスが凜に近づこうとしたときだった。

ピカア！！

突如ウアレんティヌスの体が光の粒子になっていく。

その様子に慌てる凜と、それと対照的に落ち着いているウアレんティヌス。

「ちょっと!!どういうこと?!なんであんた消えかかってるのよ  
」

ウアレんティヌスは笑みを小さくこぼしながら語る。

「マスター、もともと私と貴方はパスが繋がってませんでした。なので

私は自分の魔力を使って現界していたのです。しかし、先程の真名解放

および、この魂に憐れみを《キリエ・エレイソン》を使用した事でもうその力も失われました。もともと少ない魔力だった私が2回もあんな

大それた事が出来たのだから自分を褒めたいくらいです。」

こんなときでもふざけたこのサーヴァントになぜか悲しみを覚える。

今回はたまたまこの日、この時期に私が召喚して生まれたイレギュラー。

もしかしたら二度と現れる事は無いかもしれないのに、それでもこの英霊

は笑っていた。

「最後にマスター凜、私からの助言です。よく聞いていて下さい。」

黙って首を縦に振り耳を近付ける。

ウアレんティヌスも凜の近くで呟く。

「・・・・・・・・恋する乙女は強いです。そして諦めなければ願  
いという

ものは叶うものです。しかし向こうから来るものではありません。

自分から願いに行くのです。もし悩む事があるのならチョコを食べて  
糖分をとって下さい。それが・・・・・・・・私の・・・・・・・・願  
い  
です。」

気付くとそこにもうあいつはいなかった。

短い間であつたけれど、すこし楽しかったし、こう思う。



「あいつ、何しに来たのかしら？」

その後私は駄目もとでもう一度サーヴァントを召喚したら、今度はちゃんと

した英霊が来ました。

まあセイバーじゃないのが残念だけど。

「凜、誰に話しているんだ？」

「んんん？世界中の恋する乙女にかな？」

そう言いながらアーチャーが作ってくれたチョコレートケーキを食べる。

「まったく、私のマスターはとうとう馬鹿になってしまったのかね？」

とりあえずガント打ち込んでおきましょう。

乙女たちに・・・・・・・・幸あれ！！

もしも、バレンタインに聖杯戦争があったら・・・・・・・・・・（後書き）

バルザ・・・・・・・・フラグ立てすぎだろ

言葉で伝えるよりは行動ってか？（前書き）

一ヶ月ぶり・・・・・・・・へブシャ！！

言葉で伝えるよりは行動ってか？

——  
声が出なかった。

突然の出来事に混乱していたのだろうか……。

いや、そうじゃなかった……。

ただ目の前の少女に。

そのあまりの美しさに。

——俺は、言葉を失っていたんだ。

F a t e / s t a y / n i g h t } おかしな英霊 }

明SIDE

「ありや？この感じは………な〜んだ。結局最後のサーヴァント

召喚されたんだあ。つまんねえのぉ〜」

どうもどうも、皆さまお待ちかねの御宝 明どすえ。

現在世界から供給されたアパート”コーポ冬木”なるところで過ごしています。

はああ、でも英霊全部が揃うとはなんか予定通りって感じ？

え？俺？いやいや、おれ関係ないし。だって俺自由参加だもん！！

別にサボって寝てよおが、遊びに行こうが自由です！

まあ、運動感覚でちょいちょい戦いには参加するつもりだけど。

「それにしても暇だ。暇すぎて、魔術教会破壊したい……………」  
「」

ああ……………あの根暗な野郎ども壊滅  
させてえ

何が「君の体を少し永久保存させてくれない？」だ。

少しの割にはなんで永久なんて言葉入んだタコ、矛盾してんぞ！！

「とりあえず外に出るか……………」

俺は英霊らしからぬジャージ姿で街を探索する。

最近は、といっても、ここ2日はこれが日課になっている。

もしもの時のための脱出経路や、作戦を立てるときに必要な地理的  
学習だ。

そんな事を考えつつちょうど角を曲がった時だった。

「それでは先輩今日は先に学校に行ってますね。」

門から一人の少女が歩いてくる。

容姿は美。

胸は谷。

プロポーションは言う事なし。

一目見て気付いた。

そのあまりの美しさに。

——俺は、言葉を失っていたんだ。

「あれ？今なんかセリフが被った気が……」

つつい見とれていると、少女の方もこちらに気づいたらしく軽く会釈してくる。

まあこれと言って用事があるわけでもないのでもちからも軽く会釈してからランニングするフリをしてその場を後にする。

4〜5分ほど走った所だろうか？  
町はずれにちよつと怪しげな洋館が現れた。

「べつ別に遠くから見たらたまたま興味を惹かれて、きちやっただけじゃ無いんだからね!？」

「あんだ、人の家の前で何してんの……?」

あちゃゝ持ち主出現だ。なんてこつたい

「いやはやうゝむ。なかなか良い物件ですなあゝ」

はい。ジャージ姿の俺がこんな事を行ってもなんの説得力もありません。

案の定この言葉に怒ったのか一層視線が厳しくなる。

さてさて、どう誤魔化すか………

凜SIDE

眠たげな目を擦りながら学校の準備をする。

何気ない動作。

けれども今日は少し違った。

「ん？誰か見てるわね」

意識が覚醒してはつきり気付いた  
誰かが私の家をずうずうずうずうずうずとみている。

その視線に耐えきれなかった私はすぐさま学校の準備を済ますと家  
を出て  
その原因のもとへ向かう。

「あんだ、人の家の前で何してんの・・・・・・・・？」

見た感じ私と同じ年かそれより上の男に声をかける。  
ジャージ姿のそいつはいるだけでなぜか異様な雰囲気醸し出して  
いた。

「いやはやうゝむ。なかなか良い物件ですなあゝ」

なんなんだこの男は？絶対に嘘だと思っ様な発言をさも当然の様に  
吐く

ふざけているのかしら？

頭に血が上り始めていたころ霊体化していたアーチャーが不意に話しかけて来た。

「凜注意しろ。その男サーヴァントだ。」

咄嗟に私はアーチャーの助けを借りて目の前の男から15M位距離をとる。

この男がサーヴァント？確かによく良く感覚を研ぎ澄ませてみれば魔力は感じる。だが、英霊にしては少ない気がする。

「ありや！ばれちゃったか」。まあ冬木のオーナーに隠し通せるとは思ってたけどさ。」

やれやれと言った感じで手を振る姿はまるで此处まで予想していたかの様な態度だった。だとすると何か仕掛けてくる可能性もある。

「アーチャー！……！」

私の意図が分かったのかアーチャーは弓を出すと男に向かって3本の矢を放つ。私自身もアーチャーの射撃スキルを知っているから外すような事は無いと思う。

「おいおいマジかよ……こんな至近距離で矢を撃つってお前ら頭大丈夫かよ！?? 一歩間違えば死ぬぞ！」

どうやらダメージは……無いみたいね。あつたらあんな言葉でないでしょうし。

けれど、分かった事がある。相手のあの男雑魚の英霊つてわけでもなさそうね  
だってあのアーチャーの矢を片手で3つとも素手で掴んでいるもの。

「なんか誤解してるみたいだけど俺は別に戦いに来たわけじゃないぜ!？」

「誰が敵のサーヴァントの言う事を聞くのよ!!」

私も負けじとガントをいくつも放つ。

いつの間にか手に中華刀を持ったアーチャーも応戦してくれている。

敵のサーヴァントもとうとう苦しくなったのか、押される一方だ  
その証拠のジャージのあちこちに攻撃がかすっている。

「はあ、別に争いに来たわけじゃないけどそっちがその気なら・・・  
・・・  
・・・容赦しねーぞ？」

ゾクッ！！！！

あいつからいきなりものすごい殺気があふれ出た。  
ふと額に手を当てると湿っている。

認めたくは無いけど恐怖で冷や汗が出たみたいね

「凜、少し距離をとらないか？私も本職は弓兵だから接近は苦手  
ね」

アーチャーの作戦に乗り足に強化を施して一気にその場から離脱する。

だが、

「おいおい！せっかく気分が乗って来たんだ！逃げるんじゃないよ？」

強化と英霊の脚力を使ったこのスピードよ！？  
どうして並走してついてこれんのよ！？

「I am the bone of my sword .  
体は剣で出来ている。」

耳のあたりでその呟きが聞こえると何やら禍々しい魔力を纏った矢を握る  
アーチャーがいた。

「ふむ、避けれるものなら避けて見たまえ」

弓に装填されたその矢がゆっくりと敵と重なり合う。

そして

「  
フルンデイング  
赤原獵犬！！！」

赤い光弾は的に向かつて一直線で飛んで行つた。

奴もそれに気がついたみたいだけれど、様子がおかしい。

「なんだこいつ！？どこまで追っかけてくるってんだよ！！」

そう、アーチャーが放ったあの矢はアーチャーの意志がある限り  
何処までも追いかけていくという魔劍の矢。

そう簡単に防がれてたまるもんですか！！

「アーチャー！！今のうちにとどめを刺すわよ！！」

ポケットに隠しておいた宝石を取り出して構える。

大丈夫、油断はしていない。

けれどもそこで待ったが掛った。

「駄目だ。ここはいったん引くぞマスター。」

まさか自分の味方から待ったがかかるとはさすがの私も思わず、少し惚けてしまった。

「はあ？あんた何言ってるのいまな」「駄目だ……………凜気付かないのか？

奴の力に……………」？」

えらくこの自信過剰な英霊がここまで嫌そうな顔をしている。

そんなにも相手がおかしいのか？

私もマスターだからステータスを見るくらいはできるけど、一体……………

その後私は自分の目を疑った。

「……………って、全部Unknownってどういう事！？？  
？あ、でもクラス

だけは書いてある。うーんと何何？ってアルバイターって何よこれ  
？！）」

「おやおや？どうやらその反応……………俺のステータスを見

たか？」

にやにやと不敵な笑みを浮かべながらいつの間にか手にした片手剣を私たちに向けて歩いて来る。

その動きに一切の迷いは感じられない。絶対に殺しに来る！！

「でも、だからって私は諦めないわよ！！！！たとえ相手の力が分からなくなっただって！！

意味分かんないクラスだって！！」

今だあの赤い矢を相手にしているあいつに自分にできる攻撃をたくさん仕掛ける

どれほど撃ったかは覚えていない。それほど撃ったからだ。

でも、途中で錯乱状態の私に気付いたアーチャーが無理やり私を離脱させた。

なんでもあの時の私はとても正しい判断が出来るとは思えない。だそうだ。

そして不思議な事にあの男も私を追いかけてはこなかった。どうやら本当に戦う気が無かったみたい。。。。。

「はあ、今日は学校休もうかしら。。。。。。」

幸い戦闘を行った場所は家から少し離れたところだし、家の結界も

十分、

いえ十二分に発動した。今回の様な失態はしないわ。

次にあつた時、絶対に倒すんだから!!

S  
I  
D  
E

凜とアーチャーが離脱した戦闘区域で今だ戦う人影がある

「ックソ！マジでしつこいなこいつ!!」

隠しもっていた片手剣でいなしているがいかんせんまったく止まらない。

払っても払っても追いかけてくる。

「はあ、本当は使いたくなかったけど仕方ないよな……」

「

明は剣を構えると同時にある言葉を紡ぎだす。

「消去」

途端まるで刃で切ったかの様にバラバラになった赤原獵犬がその場に転がっていた。その切り口はまるでバターで切ったかの様になめらかでいて美しくある。

さらに驚くべき事に当事者の目の色もいつの間にか青に変わりその様は

死神の様だった。

そして何事も無かったかのようにこの持ち主が逃げに行った方向に目を向ける。

「あの餓鬼……俺のモーニングタイムを邪魔するとは、ナンセンスだな!!」

体をくるっ！と回転させて明は帰って行つた。  
既に目の色も元に戻っている。

この時明が何をしたのかはこの世界でもほんの一握りの人物しかない。  
その話はまた今度

言葉で伝えるよりは行動ってか？（後書き）

ステータス

クラス アルバイター

真名 御宝 明

筋力 Unknown

魔力 Unknown

耐久 Unknown

幸運 Unknown

宝具 Unknown

耐魔力 Unknown

スキル 判明しているのは”直死の魔眼”（制御可能）

感謝コーナー

ユウト様、リヨウタ様感想ありがとうございます!!

作者もこれから亀ではありますががんばっていきます!!

あなうしなうしな

あ



聖杯戦争に行こう。

F a t e / s t a y / n i g h t    〽おかしな英霊

【こしあんよか、粒あんだろ!!】

明  
S  
I  
D  
E

どうも、御宝 明です。

前回は赤い女と赤い男に絡まれて思わず力を使ってしまった。  
でもでも、これは戦争なんだから仕方が無いよねえ~~~~

さてさて、前回の様な失敗は繰り返さないように知り合いに頼んで  
置いた魔力を抑えるブレスレット、イヤリング、指輪の三点セットを  
さらに強化していつものランニングに臨んでいる次第でございます。

「この町にも随分慣れてきたなあ。けど、なんかやっぱり刺激が  
足りない  
し、うゝん悩みどころ満載だな」

自宅前の階段で一息ついて座り込む。

見た目年齢17歳くらいの男が時間で言うと朝の9時、しかも平日  
にここに

いてはおかしいが、いかんせん。俺は英霊。大丈夫なのさ!!!

「あつ！そうだ。まだ神社にお参りには行ってなかったっけ!!」

いやあ、俺って昔からパワースポット巡り？にハマっててさ、  
この町の神社にも言っただいじ度いい機会かな？

・ ・ ・ ・ ・

「それで貴方は何しに来たのかしら？」

正直言うと、俺にも浮かれていた時があったんだよ……

何がパワースポット巡りだ？ええ？

っへん！いざ柳洞寺ってところに行ってみると確かにあったよ。パワー

でもさ、そこにまさかの大魔術師の英霊なるキャスターさんまでいるとは

奥さん思いますう？

「何をぶつぶつ言ってるのかしら？そんなに消し炭になりたいの？」

ロープを目深に被って妖しい雰囲気醸し出すこの女性。  
手にした杖からも強大な魔力を感じる。

「いやさ、せつかくばれない様に極力魔力が分かんない様にしてたのに、

こつも簡単にはれると落ち込むっしょ？」

そう言つて指輪とブレスレットを見せる。

するとキャスターはクスクスと笑い

「そんな三流のアクセサリーが大魔術師である私にばれないとでも思ったの

かしら？それこそ笑いものよ」

しまったあゝ！！、こう話してはいるけどもうすでに結界が貼られてあつて

・ たぶんこの中の様子は外の人間には分かんないだろうな……………

「キャスツ子さんちよいすんませんが、醤油を買いに行きたいので家に

帰し「帰すと思ってるの？」ですよね」

まあ大方予想してた事だし……………仕方ない。  
最低限の戦闘をして逃げ出すか。

とりあえず山門に向けて走る！！！！

「あら、逃げられると思ってるのかしら！！！！」

ビヤあああああああああゝあゝあゝ！！！！！！！！！！  
なんだよあの青い雷見たいな大群！！！！俺はここにこんな目に会いに来た

訳じゃないのに！！！！！！

「マジでお願いキャスターさん！！おれ戦う気無いです！！ただのパワースポット



へっへ〜ん！さっきまで散々人を使って遊んだんだ！こっちは言葉の暴力

でいぢめてやる！！！！

「それとも何？キャスターってまさか、とんでもないおバカさんな  
「黙って

くれないかしら……………」おわぁッ！！！！」

やべ……………むっちゃくちゃキレてる……………  
・  
此処はクールにいな…………いですよ〜

「てか、マジで俺の事思い出せない！？？キャスターさん。いや、  
メディアの姉さん！！」

ピクピクッ！！！！

俺がキャスターの真名を叫んで呼ぶと、攻撃が止まった。

「メディアの姉さん？……………この呼び方どこかで聞いた  
覚えが……………」

おしッ！！もうひと押しだ！！これで思い出せば戦わずに済む！！！

「俺ですよ！ほら昔一緒に魔術を習ったじゃないッスか！！！（まあ俺そんな事

必要無かったけど……）」

「よく見ると貴方の顔、明にそっくりね……………」

おし、これを見せれば俺って分かるかな？  
なら試してみよう！！

「ほら、姉さんこの人間が持つには不釣り合いな俺の……………  
……………  
……………マゲナムを忘れたかい？」

この前と同様にベルトに手を……………かけられなかった。

「もう分かってるわよ。その顔にその一歩間違えば警察に捕まる行動。

……………久しぶりね、明の坊や。」

そういうと俺を笑顔で迎えてくれた。

さっきまで鬼のように有った魔術の力も消えていった。

ここで話を少し変えるが、俺とメディアの姉さんは実は知り合いなのです!!

俺は霊長の長たる座にいる時、なぜか意識があり自由に行動が出来る。

その時に色々な細工をして、自分の行ってみたい所に行ける。たとえば……

神話時代や、戦国時代に一応召喚という形ではあるが行けるのだ!!

メディアの姉さんにあつたのはまだ姉さんが唯の魔術師の頃で、俺と一緒に魔術を習ってたってわけさ!!!

「そう……道理である時おかしいと思ったのよ。唯の人間にしては纏う雰囲気がるで違う、それに保有する魔力量も計り知れなかった。」

納得がいった表情で俺に静かにだが歩み寄ってくる。  
完全に敵意が消えていた。

「第一、貴方に私みたいな所詮魔術師が勝てるわけがないものねえ・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
魔法使い《……》さん？」

あれ？俺・・・・・・・・・・いつ魔法使いつてばらしたっけ？

「その顔はいつばらしたっけ？って顔ね。ふふふ、貴方気が着いてないかも

しれないけど昔、貴方が私を敵から守る時に使ったのが見えたのよ。」

「ふん。って事は、俺の強さも知ってるってことでしょ？」

「当たり前よ。貴方の魔法はほかの魔法の中でも一番ずるい魔法じゃない。」

・・・・・・・・・・貴方達御宝一族が独自に創り出した最新の魔法。

第七魔法・・・・・・・・・・『過程の消去』」

この時、誰かに見られているような嫌な目線があるような気がした。

あんこっでおいしいよね（後書き）

ちよいちよいオリジナルを加えて行きたいと思います。

## 第七魔法について（前書き）

魔法の参考にしたのは魔人探偵脳噛ネウロの  
SIXとの最終戦で使用した魔帝7ツ兵器です。

## 第七魔法について

オリジナル魔法。

### 第七魔法 『過程の消去』

文字通り物事のあらゆる過程を消去する。

たとえば、この手に銃を持ったとする。もちろん対象に向けて”撃つ”  
と言う過程が必要になるわけであるが、この魔法を使用すると、  
撃った”  
という結果だけが残る。

さらには医学の知識や、魔術の知識が全然ない状態でも、習得する  
と言う

過程を消去して、習得したと言う結果だけが残る。

近接戦闘においても剣を持って戦いに行くとする。

切ると言う過程を消去して切ったと言う結果を作る。

この時に、切れ味、刃こぼれ、自分の力、相手の固さ等の過程は一切存在

せず、ただただ、切ったという結果を残す。

明の一族の場合は、全員魔法にまでは至れなかった。

せいぜい上級大魔術止まりであった。

明の場合も同じで魔法に至ったのは英霊になってから。

死ぬ事で運がよく英雄として世界の根源と繋がり、アカシックレコード

を垣間見た事によりその知識で一気に魔法にまでたどり着いた。

現世でこの魔法の存在を知っているのは青の魔法使いと、魔導元帥、後は死徒の姫様に封印指定の人形師くらいである。

彼らは、というか、魔法使いたちはこの御宝一族の魔法を危険視していた。

なぜならば

．．．．．この魔法を使えば”他の魔法すらも使えるようになるから”

例として出すなら、魔導元帥の第2魔法の場合。

並行世界の運営の知識、宝剣の作り方、そのために必要な学習知識、  
金銭、魔力、その他e t c．．．．．と言った過程が存在するが、

第7魔法はそう言った過程を消去して、結果論として

第2魔法を習得した。という結果を生み出す。なので一度この魔法が完成

してしまうと、止められるものはそうそういない。

主人公の主な説明

【真名】 御宝 明

【クラス】 アルバイター

【宝具】 第七魔法

【スキル】 直死の魔眼

このクラスのきっかけは、生前明がコンビニでアルバイトをしていた時の

事。

ある日ものごくお店が混んでしまい大忙し！！店長や、オーナーも駆け巡る

仲、たった一人でレジをこなし、尚且つそのスピーディーな客捌きから

後輩バイトや店長たちに『ウォーーーー！！！！英雄だあああああああああ！！』

と言われた事によるもの。こんな少しの信仰だけで英霊になった。

直死の魔眼についての説明

明が死んだのはその容姿の通り高校の3年の時である。

だが、その丁度1年前に交通事故で1カ月生死を彷徨う事態になった

事がある。その時に死というものを垣間見て触れる事によりこの力を手にいた。

そして丁度そのころ偶然的か必然的か、世界と座により強制的に仮契約の

様な状態になった。

そのおかげで本来人間には過ぎたこの力を生前は点を見ても大丈夫な位

制御出来ていた。

## 世界および座との関係

世界および座との関係は、なぜか分からないが、明が主体となり明の命令

をおおよそその範囲で聞いている。

けれども明が仮に世界に”お前滅びろ”と命じても限度が過ぎた事なので

仕方がわない。

しかも明が過去の神話の世界に行きたいから連れて行けと言つと、

世界は

その意思を尊重して過去の時間軸まで飛ばしてくれたり、今回の様に住みか

まで提供してくれる。

## 進みゆく戦い（前書き）

ギリギリ滑り込みの一ヶ月更新成功！！

今後亀さんががんばります！！

## 進みゆく戦い

俺はさあ、こんなになってもまた此処に居られるって事がうれしいんだよ。

だからさあ、お前が悲しむことは無いんだよ。

むしろ感謝さえしてるんだ。だから……泣かないでくれ

、泣かないでくれよ。

大丈夫！！悪い奴が来たらこの明様が倒してやるから！！——  
は大人しく  
見守ってる！！



F a t e / s t a y / n i g h t  
おかしな英霊

明  
S I D E

あの後なんとかメディアの姉さんと戦わずして家に帰る事が出来た。  
なんでも姉さん曰く、「貴方と戦って私たちにメリットが無いものだそうです。」

んなこと言ったら俺にだってメリット無いよ!!!

今は家へ帰る途中なのですが、いかんせん、さっきの戦闘の時に五感強化をしたままなのを忘れていて解除しようとした時だった。

「嫌あああああああああああああ!!! 御爺様やめてえええ!!!」

耳の鼓膜をこれでもかっ!!! ってくらい刺激する叫び声が俺の頭に響く。

この声に気が着いてるのは………おいおいマジかよ誰もいねえじゃ

ねえか!!! どうなってやがる、この悲鳴だぞ!?

あたりを見渡すが本当に誰も気が着いていない様子だった。

「って事は……やっぱり、防音の結界が張られてやがる。  
何処の  
悪ガキだ？」

俺はすぐさま原因と思わしき場所に直行する。  
で、意外とすぐに見つけた。

そこはちよつとゴージャスな屋敷で、表札には間桐と書いてあった。

「はあゝん、間桐さんかあゝ俺の耳をいじめてくるのはゝ」

五感強化は既に解除してあるが、先程の悲鳴のせいで耳の奥がジンジンする。

ちよつと俺怒ってまあゝゝゝゝすゝ

「Excuse me?ちよつと失礼するよ!!!!!!……あ  
あらよつと!!」

一回ノックしたけど反応が無いので悪いけど扉を蹴破らせてもらう。

し~~~~ん

「ふむふむ、知らない人が入ったのに誰も来ないとは、セ・ムしますか？」

さすがに扉を放置して置くわけにもいかないのできちんと立て掛けてから  
原因と思わしき地下へと足を進めるのだが…………

チャキ…………

「そこまです。これ以上マスターの家を荒らすようなら容赦しません。」

O h , Y e a r . . . . .

首筋に伝わるヒヤリとした嫌な温度

間違はなくこの刃物を当てている人物はかなりのやり手だと言う事が分かる。

「これは失敬。けれども俺も好きでこんな所に来たわけじゃないんでね」

浅く呼吸をして精神を落ち着かせる。

下手に動いてはい、お疲れ様ってなったらどうしようもない。今は時を待つばかりである。

「ではなんの用で此処に来たのですか？」

姿を見せない様に完全に背後に回りながら、声からして女性？が問いかける。

「お宅の誰かが地下で拷問ごっこでもやってんのか知らんけど、耳障りだからちよつと抗議に来ただけでありんす。」

ピクッ！

おお！！このアマ！！油断しやがったな！！俺はこの一瞬のすきを見逃さなかった。

「はあああああ！！『切った』！！」

一瞬だけナイフを握る。ただそれだけでいいのだ。  
それだけで俺の魔法を使えば事が終わる。

俺の言葉とほぼ同時に首筋に伝わる刃物と思わしき物と、それに繋がっていた

鎖が綺麗に『切れた』。

「ッ!!??.....これは!!!!なぜ貴方がこの魔法  
を使えるのですか!!!!  
私が知る限りこの魔法を使えるのは.....

ようやくと振り向く事が出来たので犯人の顔を見ようと振り向く。

あの変態男以外知りません!!!!」

そう、それは――運命だったのかもしれない。

「………そ、そそそそそのめまぐるしいナイスボ  
ディ！！！！わ、忘れるわけが  
無い！！！！！！お前、いや、君はまさか………メデ  
ーサたん！？？」

おおおおおおお、おお俺は夢でも見ているのか！？？？

昔気ままに行った”神話の世界に行ってみよう！！”で勝手に神話  
の世界に

召喚されて出会った一人の女性。

3姉妹だったらしいが、俺が一番美しいと思ったあの人。

そう………メデューサたん！！なんどもアプ  
ロチしたのに

「貴方………ありえなくらい変態ですね」って引き気味で言  
われた

その時はもうショックで一回座に帰っちゃった。

でもまたこうして会えるって事はやっぱり運命？

「やはり君と俺は運命の赤い糸で結ばれていたんだ！！この気持ち

まさしく

愛だあああああああああああ！！！」

「知りません！！貴方は昔からそうやってしつこいんですよ！！！！！！」

俺の猛烈なるキスキスキッス！！！！の嵐を右左に体を捻らせて回避していく。  
え？なんで魔法使わないかって？面白くないじゃん！！！！

「ところでメデューサたん。どうして此处にいるの？」

「……………いきなり冷静になるんですね。まあ貴方に  
いっても  
仕方がありませんが。」

メデューサたんの説明曰く、ここから先の地下で自分の本当のマスターが  
なにやら体を魔改造されているとのこと。  
ん？

「メデューサたん、本当のマスターってどゆこと？」

俺が首をグイッ！メデューサたん近付ける。

それと同時にメデューサたんは体を後退させる。

「それは、あまり言いたくは有りませんが、この家の力でいま私は別の人

と契約している状態です。後、あまり真名で呼ばないでください誰が聞いて

いるか分かりません。」

あくまで冷静に対応してくる。

うーん、少し面白みが無いな

「んじゃなんて呼べばいいの？」

「ライダーをお願いします。そういえばなぜ貴方はこの地に現界している

のですか？……………まさか、貴方もサーヴァント！？」

また俺から距離をとるめでゆ・・・ライダー。

そんな警戒しなくてもとって食おうなんて考えてないのに・・・

というか疑問があるんですけど

「ねえライダー、お前は真の主を助けたいと思わないの?」「!!!?  
?ッ」・・・あ

やはり助けたいんだ。」

昔からそうだ。

こついう一途でやさしいところは英霊になってもちつとも変わってない。

まあそこが彼女の美点であり、大人っぽさなんだけど。

「俺も今やつと思い出した。ここつてあの間桐の家だったんだな。どうりで

蟲くせえわけだ。なあ・・・そこに隠れてるワカメヘツド君?」

俺はリビングの壁の反対側を指差した。

さあ・・・・・・いつちよ行くかあ!!!!!!

シンジSIDE

クソッ！！なんなんだよあいつは！！！！

いきなり玄関の扉を蹴破ったかと思うとあっさりライダーのやつも  
圧倒

しちゃうなんて、どんなクラスだよ！！？

「俺も今やつと思い出した。ここってあの間桐の家だったんだな。  
どうりで

蟲くせえわけだ。なあ・・・・・・・・・・そこに隠れてるワカメヘッ

ド君？」

！！！？？ッ気づかれた！！

考える時間なんてありはしないだろうし、大人しく出て行って・・・

・・・

・・・その後ライダーを使ってこのわけの分らないやつを消そう！！

「フンッ！！僕に気がついたからどうしたって言うんだ！！」

ああそうさ、僕に気がついたところで地下には桜とお爺様がいるんだ！！

こんなやつにいま殺されるわけがない！！

「おいライダー！！何してんだよ！そんなやつ早くやつちまえよ！！」

数ではこちらが有利なんだ。たかが英霊一人に遅れをとるほど間桐の魔術も衰退したわけじゃない！！

手に持った偽臣の書を使い僕も魔術を使う。

体中からいやなキシメキが聞こえるがそんなことはどうでもいい！！僕は力を持ったんだ！！その力を使わないでどうするんだよ！！

「ライダー押し通せ！！宝具の使用も許可する！！！」

僕の放った黒い濁流のような魔弾があいつの目前にまで迫る。

けれどもあいつは動きもなかった。それどころかただひたすら熱の籠っていない目線で僕を見つめてくる。

「お前・・・・・・・・・・屑見たいな人間だな」

その言葉が耳元で聞こえた。

あれ？じゃああいま僕が見ているこいつは誰だ？なんでこいつの声が耳元で聞こえるんだ？

「ら、ライダー・・・・・・・・て、てって敵をさっさと殺せえええええ  
！！」

「お前もう・・・・・・・・十分うざいよ」

必死にライダーに命令を飛ばしたがそれが最後。  
次に目が覚めた時にはもう僕は間桐にはいなかった。

## ライダー SIDE

驚きましたね。

シンジが臆病ですぐに叫ぶ事は知っていますが、まさかこれほどまでの絶叫  
を出すとは……………見くびってました。      と言うか  
うるさいです。

ですが、やはり明<sup>ヘンタイ</sup>には勝てないですね。まあ全英霊の中で  
最強ですから仕方が無いですか。

「さて！ワカメヘッドも気絶してしまったみたいだしライダーのマ  
スター  
でも助けに行きますか！！」

確かに床には白目をむいて倒れているシンジの姿が。  
わずかな時でも一応は主だったので頭を下げておく。

「……………まあいいや。とっとと地下に行きマッスル  
！！」

そうして私は彼の後について行く。

待って下さい桜。絶対に助け出して見せます!!!

おう、俺かい？俺の名前は……って、ああちょっと！！（前書き）

約一か月ぶり？

グーテンモルゲン！

それじゃ今日もびりっとかんばるぞー！！

おう、俺かい？俺の名前は……って、ああちょっと！

マクラからクマ。

ええ！？枕が大きいの？

それとも、クマが小さいの！？？

正解は、逆から読んでも同じだよ

S  
I  
D  
E

F  
a  
t  
e  
/  
s  
t  
a  
y  
/  
n  
i  
g  
h  
t  
〜  
お  
か  
し  
な  
英  
霊  
〜

うす暗く不気味で仕方ない地下へと続く階段を明とライダーは息を殺しながら下りていく。

先程まで鳴り響いていた悲鳴はもう聞こえなくなっていた。

「しかし明、貴方の目的は本当に何なのですか？ 仮にもサーヴァントといえ同じ聖杯を求める者。こんな事をしても貴方にはなんのメリットもない。むしろデメリットの  
はずです。」

緊張した面持ちで前を歩く明にライダーが問う。

実際の所確かに明にはなんのメリットはない。

だけど、そんな事はどうでも良いのだ。

「確かに俺には何もメリットは無いけど、まあ強いて理由を上げるなら、  
軽い暇つぶし？かな」

明がこの聖杯戦争に参加した理由も暇つぶし感覚。

なので面倒事は明にとっては暇つぶしになる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・貴方って人は本当に・・・・・・・・」

ライダーは呆れて物が言えない様でこのうす暗い所でも呆れているのが分かる。

というか、呆れない方がたぶんおかしいであろう。

だって他の魔術師や、サーヴァント達は皆血眼になって聖杯を求める  
と言っのに、この男ときたら、「え？ 3対3の合コン！？ マジッ  
！？ 絶対行くから！！」  
と言っ様なノリで参加しているのだ。

「まあいいじゃんいいじゃん！！ってそうこうしている内に謎の部  
屋の前に  
着いたでござるの巻き。」

明かりなど皆無の扉の前に突き立ち尽くす二人の英霊。

一人はかけがえない主のため、一人は暇つぶしのため。

「スキル……直死！！」

【斬!!】

片手に持った剣で扉をまるでバターの様に切り裂く。  
そこには摩擦による抵抗とかそんな物は存在しない。ただただ殺す  
だけ。

ガガガッガガタン!!!!!!

破壊された扉の向こうには何か……………いる。

「サクラ!!!大丈夫ですかサクラ!!!しっかりして下さい!!!」

見るとライダーが倒れ伏している女性を必死で呼び掛ける。

そこに何とか意識が戻ったのかかすかな声で反応する。

「ライ・・・ダー？・・・どう・・・し・・・て・・・ここに？」

「・・・！！ああサクラ！！もう・・・もう大丈夫です！！何も心配いりません！！」

弱弱しく反応する桜をもう母親の様にやさしく、そして涙ぐみながら抱きしめる

ライダー。今この時だけは少なくとも二人は通じ合っていた。

だが・・・

「カッカッカカ！！！ライダー何しに来おった？お前の役目は侵入者の排除であつたろつ。」

「憎悪！！！！」

「そのお前がなぜここに居る？」

「憤怒！！」

「もしやとは思つが………事を違えたか？」

「醜！！」

「ッ!!……私は……もう私は貴様などに従わない!!私の主はサクラだけです!!!」

突如として目の前に現れた謎の老人。

立場的にはライダーの方が下の様だが、その老人の眼は完全に死んでいて

ただただ聖杯にしか眼が無いと言った様子だ。

対するライダーは既に覚悟を決めていて何があってもサクラだけは渡さない、

この腐った運命から解放することだけを使命とすると心に決めた。

「おいおい爺さん、誰か大事な男を忘れて話し勧めてないか？  
たとえばこの俺とかさあ……」

ライダーと蟲の翁こと間桐 蔵現との会話を終始あくびで聞いていた明。

だが、至って本人は適当にやるつもりなど検討もない。

むしろ、俄然やる気は満々で行った所だ。その証拠に既に眼は【直死】に変わっていて、愛用の剣も構えている。

「カカカッカ！！笑止！！貴様の様な何処の馬の骨かもしれんサ  
ーヴァント  
など相手ではないわ！！」

ゾワワツツッ！！！

蔵現が言葉を放つと、奴の体が蠢く。

筋肉の動きとかそんな簡単な動きじゃない。体の内部で何かが動いている。

表現をするのならこんな感じだ。

だが、そんな蔵現を見ても明はなんの関心も示さなかった。どうでもいい……顔にはその表情がうかがえた。

「なあゝんだ。結構長く生きている割にはそんな程度の魔術師か使えないんだあゝ。やっぱり間桐だなあゝ」

明の口から出るのは単なる嫌み。  
そう、明にとって蔵現の魔術など”その程度”で終わるほどのものである。

確かに、凜や士郎、ライダー達にとっては厄介きわまりないこの魔術。  
核を殺さなければ何度でも蟲を集めて復活するこの力。

しかしだ、第七魔法の前には最早意味をなさい。

生憎残念なのは、この魔法の存在を魔法使いと協会の極々一部、それも片手で数える程度の人間しか知らない事だ。

現に、明の正体にすら蔵現は気付かずに”何処の馬の骨”とまで言っている。

「よし決めた！！俺を馬の骨呼ばわりした事を後悔させるぞぉ」  
♪

そうと

決まれば………っと、【固定】!!」

キイン!!

「っ!!これは………すべてが【固定】されているじゃない??」

蔵現の言うとおり今明は固定の魔術を用いて部屋のすべてを【固定】した。

扉は閉じた状態で【固定】しているので、開ける事は愚か、壊す事も出来ない  
完全密室空間が出来上がった。

「若造がっ!!調子に乗りおって!!!!」

蔵現の体を構成していた蟲達が一気に明、ライダー、桜に襲い掛かる。

それはまさに蟲の大津波とも言えた。

黒い濁流が3人を飲み込んでいく。  
苦しい顔をしながら明達はどんどん沈んでいく。

「クソッ！、マキリダトイツテナメテイタッ。ムネンッ！」

訂正。

ものすごい笑顔であつた。

「はぁ・・・明、いい加減にして下さい。いくら貴方の張ってくれた障壁があるからって周りに蟲がいたら不愉快です。」

「あ、やっぱり？んじゃ・・・・・・・・・・【殺した！！】」

バサ・・・バサバサ・・・

先程までの蟲の羽音が一斉に消えた。

明が言葉を發した今、この部屋には明達の息遣いしか今は無い。

「な・・・・・・・・どういう事じゃ！！貴様！！何をしたッ！！！！  
？」

残った一匹の蟲から蔵現の声が聞こえる。

「あれ、100年以上は生きている間桐の党首でさえも知らない  
もんなの？」

俺の魔法って？」

一步蔵現に歩み寄る

一步蔵現が下がる

「歴代の魔法の中でそうだなあ、第一魔法と第六魔法以外には負けない

魔法であるこの第七魔法を．．．．．」

「だ、第七じゃと！??? そんなものが存在するものか!!」

しかし、焦っているが、蔵現はひそかにほくそ笑んでいた。

）SIDE蔵現）

何が第七魔法力!!

ふざけた事をぬかしおって

だが、奴はまだ気がついていないようだ。

わしの核が今まさに貴様らが全力で守っているサクラの心臓にある  
と言う

事を！！！！

小奴め、今はせいぜい勝った気でいるがいい。

所詮今の体が殺されたところで、サクラさえ生きていればわしが死ぬこと

は無い！！！！

けれども、それがいかに自分の思考回路が愚かであったかを知らされる結果でもあった。

「あつ！一つ言い忘れてた！さっきサクラちゃんを直死で見えたんだけど、  
どお～～～～～～～～も心臓の所がおかしいんだあ。蔵現さん、どうして

かなあ～～～～？僕馬鹿だから分からないや～～～～」

「んっな！???き、貴様まさか気付いていたのか!？」

すると、御宝と名乗った男は邪悪な笑みをより一層深くして笑った。

「えっ！何のこと？」

口ではそう言いつつも、確実にわしの核の存在を知っている!!

ああ、どうやら此処までのようだ……。

蔵現SIDE OUT

SIDE

先程の蔵現との会話のなか、ライダーに弱ったサクラを明は自分の近く  
まで引き寄せさせた。

「貴方は一体サクラに何をするのですか??」

今までの明の行動から決してサクラを苦しめる様な事はしないだろうと

多少の信頼はしているライダーであるが、やはり自分のマスターであるが

故、多少なりとも警戒はしてしまう。

「何、ちょっと心臓の病気を治すだけだよ………」

そういうと、蒼くなったその眼でサクラの心臓の部分を凝視しながら手に持った刃物に力を加えていく。

「これは．．．．．なかなかいいものを持っているね、桜ちゃん。これならグラビアの表紙もいけ．．．．．分かったからライダー。しっかり治療するから。だからこの首元にあるナイフを今すぐどけてくれ。お願いします！！あやましますからってあああああ！！ちよっと切れた！！」

どうやら変態の明君は、こんなときでもスケベさんだ！！

「ゴホン！！気を取り直して、蔵現よくその醜い体で見てろ！！」

蒼の目を光らせ、手にしたナイフでサクラの心臓を一突き！！

【貫！！！！】

「！！！？ゴフッ！！」

横たわっていたサクラの口から血と一緒に、小さな蟲が出てきた。

「こ、これは！？」

「どうだライダー、分かったか？この糞じじい、サクラちゃんの心臓に

自分の核を入れていやがった。そして、これがその核だ！！」

そのままの勢いで明は直死で蟲を殺す。

「さて、糞間桐、何か言い残す事はあるか？」

観念したように蔵現は動く事をやめる。

まあ蔵現が動いた所でこの固定化された空間をどうこうできる訳が

無いの  
だが。

「カカカ……最後にお前のいう第七魔法とやらが見て見たかった」

「そうか。だけど、お前を殺すのに魔法なんか絶対に使わない。サクラちゃん  
を苦しめたお前の願いなんか絶つつつつつつ対に叶えない！！！！」

【斬！！】

その言葉を最後に蔵現は今度こそ本当に消えた。

長年続く、間桐の魔術も今ここで途絶えた。

「さて、二人とも帰るか!!」

この日、聖杯戦争を作ったとされ御三家のうちの一つが消えた。

おう、俺かい？俺の名前は・・・って、ああちょっと！！（後書き）

感想などなどなどいろいろ大募集中です！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5076q/>

---

Fate/stay/night ～おかしな英霊～

2011年6月26日22時38分発行